



淺間大燒騷動記

71  
3850





淺間大燒騷  
勸記

全部

門 71  
號 3850  
卷

早稲田 大學 圖書館  
31.10.12  
藏 書

淺間燒物譜卷一

好尚書

揚雄の解嘲の語に曰く、  
亡び際、  
見るとに盈たり、  
充者多き善、  
高の家の、  
鬼是、  
見、  
守、  
清く、  
守、

ツマナリ今時の風俗は居たりとて昔はくたつた父に  
たると云々もたつた神守ら毎々一教を以てしつた  
佛教見んや樹を以て生信せし止むたつた下志をたす  
云々長浮舟や方見り去き明和の初免より正徳極  
の妖を以て御と論守りて其願を以て信のくはり  
浮説のいふよりしものを以て用ものば東天に若し  
形と其後北の方に大白星あり其年有又明和七箇の夏星  
月中と書りしふ安永八箇の秋當南に當り鳴動の  
有る十月二日空に星孛と云ふ所あり其年小南の  
星孛

星孛星金銀星あり其年有安永の末年、新暦の  
西暦はあつたは如くある星孛なるは其年有るは  
時辰ありしは白狼のありたり其年ありしは西暦  
寛政春より後同はれく焼たつた月の夜を度く強く七月  
夕方に大鏡あり同八月の夜は鶏鳴動り天地  
震る如く其年北に國九及び近震動り上野石を  
其年の秋馬に震りて日と星を以て焼たつたは其年  
二月にありしは氣候を耕他一切を以て信し兩國大  
ゆり白馬を拜する文の傳りてありしは其年文の傳りてあり

貴賤の種を後百載は定むる在文若の千紫百文の付  
二連筋やうの程の脚韻の半葉百本の或人も未だ其傳  
やうに種に首首は後之儀の殿の根を種るも食物と違ふの味  
本は葉と種も種やうは漸く命とははるあまを有る溝壑に  
轉一は者ハ四言に難敷しる野に鹹やう有信上函國  
發動小あぶらうも一うら海有極あり其濫觴と尋る  
よ石以有事ありやう

旅枕宜憂寢の時枕

言に天原元年子孫秋の路をわたり利ととる是し浮世といひ  
藝の在依と道とんを何れと宿も雲水の定先を以脚  
の傍年をいふに海竹杖の諸國を巡り遠江秋葉定り  
伊奈橋と執衣の清小頭泡とを上の誦話に結つ宿願  
有るも社敷に本は種に枕とさるも石動し眠るもむすめ  
一由どろと取ハ何國も是れは柳の縁の夕暮時宿を借  
んやも彼方外ももいハ神仁の宮奴と云んや馬懼子  
世に世に世に世に世に一人世神と名も同や曰く旅増い宿と求るに

管テ曰ク、極秘の事、故不レ言ク。宿を乞ふ一夜を以て、  
我ト共ニ、先ルニ先ルニ、何國ニ由テ、海ノ海邊ニ至リ、  
業業ニ松栢茂リ、長門ヤ糸北志門、奥原をそそに、  
きりり、早にうらじ、  
書道一、  
遠道、  
とち、  
宮も、  
た、  
か、

今も、  
秘味と、  
院、  
一、  
か、  
せ、  
そ、  
並、  
人、

智志くも皇宇に相承ふ全體の冠を着し 旅宿乞へて  
寄りて馬山の物語とて 学館の事終る迄も 宜し敷く今  
聊評名の有りて 管上の事 旅にその道に 運居り  
よるに 勝負の体 事 けりしを 承るや 承るに  
寄宿となすに 形 應じ方の 山名を 承る  
なるに 苦すれり 是れ 形所 承るに 承るに 承るに  
や 承るに 承るに 承るに 承るに 承るに 承るに  
や 承るに 承るに 承るに 承るに 承るに 承るに

諏訪之社類と信神、令儀の事

初るに 皇孫の事 承るに 承るに 承るに 承るに 承るに  
次に 榛名 満行 大権現 第三に 宮坂 將大明神 第四に 宮  
坂 大明神 第五に 新田 大明神 第六に 八幡 宮  
物部 社 前 伊賀 湯屋 於 茂 以 神 と 祭 事 也 也  
馬利 根村 の 神 祀 南 八 幡 水 岸 熊 野 現 宿 也 也  
中 嶽 荒 舟 箱 根 の 宮 祀 唯 水 耳 系 也 也 也  
列 名 志 也 也 也 也 也 也 也 也 也 也 也 也 也 也  
大 権 現 川 上 金 峯 山 大 権 現 川 中 嶋

八幡宮田野の新海大原神延津大原神小幡高小幡宮  
松原金地社殿河津延其海野の白鳥小諸社置留  
大宮前明神雨宮原田の神社を始りやまると函山  
る月大付春日櫻の神也る作之殿小縣村のウラツナの産多にイタル延  
延と神皇先に治事にお雲の神より二とよぶに事有て神  
ちうくやさん志志延事と清し多る先一通りやさんや小宮  
原の八りの形事とぬるウラツナのやさんやさんといはる一問小宮と  
傾けたるふりう一を多るやさんといはる延事神よりトあるしと

神皇の御事より今天の御事延凡三百八十世延事と曆より  
神徳も甚々カ善ひた白くイカサ星塔の佛力を傳ふ多いとありと延  
この福貴徳留也て唯一の神と甚々善ひ感えんもあし  
是や中も各其司ト所の身護を以て職分を守り延  
産子を害はる神々多し各其形分祀禮と改むもら  
の罪咎カ定まり多る津に回津つこころたくの罪とつ  
りも多るもくろく清めたる也とのんれ也は之徳の神  
宮よりこの神此作の如く各々皆其司ト下と守り延  
お延りたるも多し志存ト立料金事多しとるの神也といふと又延  
云々下り此宮と守り耕カと身護は延ハまふ延多村の









こらうにそなた近き所なりん付も進をりて居て近きにありては  
らに延極んたかきとありては足さしうりて近きよりたり今に居る所  
階よりまのたを本井の道程程に流落するも定處にありて今に  
難多きをきくは是本の事ハ甚ク偉ぶるべきに今に信濃郡に  
はと極みの氷の形ハ有回の境とて信濃郡に居るありて上野  
の看取ハはた居る事ハ信濃の付合ハは所用也却てありて上野  
上野の形ハはた居る事ハ信濃郡ありて一は信濃郡ありて上野  
付合ハはた居る事ハ有るは神武（み）ありて信濃の形ハは  
名ハはた居る事ハ有るは神武（み）ありて信濃の形ハは  
さゆハはた居る事ハ有るは神武（み）ありて信濃の形ハは  
んハはた居る事ハ有るは神武（み）ありて信濃の形ハは  
姉善山小天狗舎の事なり

左に居る事ハ有るは神武（み）ありて信濃の形ハは  
集りて信濃の形ハは有るは神武（み）ありて信濃の形ハは  
天狗をて集りて信濃の形ハは有るは神武（み）ありて信濃の形ハは  
左に居る事ハ有るは神武（み）ありて信濃の形ハは有るは神武（み）ありて信濃の形ハは  
まば時の間よりて集りて信濃の形ハは有るは神武（み）ありて信濃の形ハは  
所及にハはた居る事ハ有るは神武（み）ありて信濃の形ハは有るは神武（み）ありて信濃の形ハは  
の禪鬼ハはた居る事ハ有るは神武（み）ありて信濃の形ハは有るは神武（み）ありて信濃の形ハは  
上ハ天狗と居る事ハ有るは神武（み）ありて信濃の形ハは有るは神武（み）ありて信濃の形ハは  
の事ハはた居る事ハ有るは神武（み）ありて信濃の形ハは有るは神武（み）ありて信濃の形ハは  
今に居る事ハ有るは神武（み）ありて信濃の形ハは有るは神武（み）ありて信濃の形ハは  
之極りにありては神武（み）ありて信濃の形ハは有るは神武（み）ありて信濃の形ハは  
之めらる事ハ有るは神武（み）ありて信濃の形ハは有るは神武（み）ありて信濃の形ハは











石名貝殿の甲と首ニ大取後船の往還と運送自在の勢に歩  
二より後を自につも空より飛上りてつと多々集る少回をいれ中回  
三より三回か買回白山四回依後回合を二回おね回相黒九戦後  
四回編の安高おと居ちちの教合其勢に難萬平傳騎相草の争  
より紅買と二量買存多さうくと着し難敵積控の甲と猪頭  
着あし二よりお居ちに入置し二里代の久代志が回の國五兩力用又  
置き後く或兩三回林の口と常し千重次居のちるんをく或ハ  
逐電席毛杯とくも名馬に并立し各曾の法の存或指合或ハ  
併申して身帯りてんとうきふし遠京さくも一糸に久集る後  
後國のち作し候を別万は左寄白を五寄と振きごる運送五人ハ

利根河老信田池の入道小山判官時信ハホを切作ハハ雲田能水の  
謀と居石火交回敵とと取而挺構ハ金多取馬書書勢弄  
策とは多あるとあ逃而逃おれり争て一及に火あなを切多放こ  
笠敷しにせしは遠く竹隈とと争多其界百目或百目の大筒と  
二に播く是あつくや包接包位の後絶と以るも懸除絶の謀と  
不し諸方の留害しに依置正るととを輝火と奉子相馬  
火丸星お居ちのちを敵と并立一同責め何當しやりあをとり  
百軍の間黒標りばせんとも傳りる常事白雲山ハ女あえちあさ諸言  
に内通とち軍の用意とをせしむるも先に在敵ち四作書書勢  
馬利根氣田ホの非違と同居を加勢ととせしむるも様各控控ハ  
も是のあ害と國の多機中に操勢り候御軍を万力を加

甲風おとつる 兵ふたぢとを後軍と六山風荒虎ヒヤウシ 孫九赤金シム 守りて城を堅固と守りて後軍をの  
用ひる事心付方なり 印一切もあつたるに承境内平りの月公  
ちくちく寄るを防ぐてやんやん城をの者ありとあり  
構つらる荒平の形に信上の境ありとありしも仰り別意運水一山  
用ひる事守りてはぬ牧南牧の神運も荒平破風の意に同  
こも此義の加勢いせざりし形も白雪山に幾千万の勢を集め  
先方其目のおまに青の浪たつぬきの浪の直ひ直雲水  
新吹の甲と着し五官浪の浪を以て南添に砂金たらし山子ササ  
堂ととも長なるしなる後連せし川カハのぬくはにあり  
ぬく運上先金うらなる勢をまきまき下りの世の房に今も保り

清の繩毎年四後の名と帯し上言下難義の尊と先陳  
ととも何れの事い極意以上北山並ふぬぬの雅水分東に  
一星も入らぬし下ありし侍をたつ脱し七月廿日陳とあり  
この螺らりしと吹るし責を殺す事あり向井端延押寄せ  
りはは園東勢も二王門を後陳とありしは園東にぬ陳とあり  
一舟に時を合せたきけりぬと大地を動し善言より火花を散ら  
るる事殺ひささくに捕首も付さし其日の軍は合刃ふ事あり  
そ侍長きり候と二日の己の刻より軍和ゆて善言の千羽鳥火  
礼星木の根種とあり候と敵奔雷の勢ありし善言よりありし  
園東勢ありしに園にありし善言と遊軍遊陳は後をたつし  
而ひし事とも善言入りし其日の軍破さしと陳和進引退し後をたつ

山城守通輝將陣を返置る事勿細長京迄上り申途に敵の隙を見  
通せむ程東方の惣勢各火先を吹ちし流鏑の牙と仰ぐ  
おし其為樂づくも斗う初るも白雲山に白雲と流鏑の白雲  
山陣ありし後岡部大夫と申し向や多しを是れも後方の本  
城へ大將陣におる之をうて書書致急の神兵大笹口公之頼に  
責入りて本城に責入る事し其明朝未明に軍兵に巡らるるに  
責入打破さす隙を極川の岡部と小柄の及大目の勢  
とばお路き申上し國を破る責入し其内は榎の責入  
らば大目の勢も皆討つてしや初る事書書致急を  
急をせりし以て七日甲午より責入を討つ事多し後岡部息と  
し流鏑の牙と申ししん多し我のいそは岡部勢攻めくは近邊に  
碓氷の勢を踏どくはつ多し我のいそは後岡部に反圍はしや  
近石岡部勢の向く方より淺多る山の勢はけし等に行り戦に  
橋負を吹せたる事何れの故と形可なりし事も合せはけり  
其内は七日甲午より責入は巴園東勢攻めくは近邊に  
砂石を飛ばし少くは吹かけり後絶ては空に雲龍玉地  
口取道石原部し其本を指さる事也脱討周武の勢に朝  
詮麻の戦ひは是にいとろくもすましうりし有極  
然り処は七日の夜より其書書致急が竊小大笹口の  
廻り責入を多くて其勢は此の隙を撃つてしや多し  
漸く初る道近其乃皆勢破りし事攻めを之や多し  
其内は思ひ多し萬代白根急を討つ事多し其  
少くは初る事多し其内は下りの勢を一面に絶

とあるを責むるは、倭國を移し東海管大なる上南海の潮を引  
 移るる流を而し移るるを天に二十三日天地あぶく阿昆の在也と  
 唐神しその碎け地を以て色を界と増す却火洞然の國を  
 ともし之を信ふと民の臣百姓をいとわくりに近遠不ある  
 るしくして改め之倭名智しきと云て城多し身は多し國東智  
 大自の軍も常に折角多し流多し血種と漂し多胡家壅  
 近ちりくして近去り移りくして言書智ハ諸百の取也  
 是途多し人すも如く護り後しけし衣も衣利根川老塚砂田  
 雨波の力遠小山川と云大川のちるより岩をも移す大日中  
 八川を移るくぬ彼處に海眉山の移山嶽と云如記百の世を  
 正行と多く之小山利宜財信より如く之二十五六有火石と

指し海を豊砂と忽ち移り重砂と云昔、移るるに大海の無水乃一多  
 四五里の間鑊湯鑊圍の地獄の在熱法の海とて燒死する者甚敷  
 去り後河と河ありと云て近巡り川りあり多分安しと思ふ河に  
 彼豊砂を一夜に移り火石も多し移りくれば利根と云  
 止る程押相して空に後七八里の間一面あり多押り後之國東  
 智皆報と云る中社と云而後波却せども倭國智といふの位に  
 亦移るるの海と云るも思ふに倭國の境と云る止るハッテ無に也  
 倭國の妹ありをレハ氣北毒と思ふ八日の九時頃の言川連後多  
 倭國心ありを其移り焼せんすトアリハスガニロキナ  
 トヒラレル熱に如く移り移り其内近のえはと云と  
 一方より神使合せり河移り神を制と云る也  
 晴河河凡の鳴るも今に移り倭國の山の焼る也

と論言りしは、後醍醐天皇に歸するも、次第に歸するに、  
雷電風雨を起し、防ぎ、炭く、切し、夏、悪鬼を逐、  
近寄る、石を、  
西、南、北、東、四方、  
石、一切、除く、  
情、  
津、  
暖、  
石、  
上、  
上、  
上、

上信西國鐵艦之書

相、  
ハ、  
佛、  
人、  
二、

鯨、  
多、  
親、  
死、  
洩、  
大、  
諸、  
金、  
上、  
御、

ホウの居道ハ少斗ハ有る事の中ニ能多の事有るハモハレニ備と云ふ  
獲食ニ至リ然レ愛シクハ喰食と云ふ事亦ハハレニ備と云ふ  
招と係蓋帯愛の茂草のそは印に遠菜の招葉おも取居し何レ種  
未白魚米細脈ぬ守由園子葉がせん荒峰も今居居る今せん方  
そ果多由年寄子信とぬ種多ゆ先暗々あるも有子信と有た  
懐一ナリ親の事と引 是と引 家も 田也 手稼多 浮世と縁と成  
これ何レ 改小捨多たを色と引 目を當りてぬ 有極少多 吾道の國と我  
誠まらる 吾山家の人の徒然あるつと 四年の名物と云 是  
茶未解や茶茶若雪印に秋遠葉草や荒峰とぬと云ふト読リ

道行鳴渡村千鳥

まふふふが只七井 何ふふも何半バ 袂衣にふも 種千次 渡江と

あき初病と油井小まものぞ 極有里者と藤を馬取置 阪井成以も  
弟殺多 何せの病と 廣平と或人 志ふふふをう 何れも 聖道  
口玉子といふ能多を 何せむらう 西多や 何れも 宜に 櫻根を 幾  
くくく 何れも 見玉と逢多 事 湯敷や 其のむ 於て 佐別し 種古岩  
と云ふあふり 何國に 備病と人 家子 寄多 遠分ら 是も 目と 三  
吹野より 何れも 何れも 柵口と 何れも 馬ても 駄賃も 亦瀬も 亦  
かち 何れも 小渡名 何れも 何れも 津島に 大津と 何れも 何れも  
の宜の 祐京 石津 是も 是も 平京の 了矢 八渡 何れも 是も 是も  
かきく 極東の 今 何れも 野と 何れも 福ニツ 四ツを 加信に 入後 平  
何れも 前 小子 信を 津京の 井子 何れも 何れも 種地 何れも 是も 田







古来の女房物と云ふ事行ふは穢の亡國國をいふ道と云ふ事は違ひが  
おかし又西親の言月あふと引運来りしと考行に反りらふより  
よりあはれん多きなりは古物と縁のあはれぬ物なりはむづかしいと云ふ  
月くう那。云々の人のむづかしいはさや早きと云ふは施し其上  
合事と縁年々くわふ又云ふあり先の名い高押にやゆきや  
晴い何田遠程在家住る。金と云ふは誰かやあるはさうや  
傳へても本朝町やあふなり借多世買ふは大澤や美踏をて若は  
寺家も在家と門毎に物を人いふは塚や野澤も京と法若に  
花根井の子借と云ふ中下と引分はさ小高井と云ふ一つなり  
縁が遠く見渡せば前めと云ふ金はやあふなりあふ人と云ふ

あ申村今園思ひあふと云つたの内子態久保の有といはれりり年  
その竹田もいふあふく糖尾多事ともの中日向書はくのみす記  
といふことさう切な下條やあふその糖も登記だにけり飢饉に  
相濱や本井を食給ふ事の取寄もあふ本根本根本根本根と云ふ  
借後と云ふ新田中りあふと云ふあふのあふけりあふ首を糖尾  
何と云ふはあふにむの駒寄多事と云ふあふと云ふ河島寄と云ふ山浦  
宮はの儀と云ふ蔵と云ふは押の登り浦も氷也尋ねる事あふり  
とも備久保格ふすはさとも名久保にけり先百所何と云ふ  
福と云ふの蓬田に八幡と云ふは後の女のあふりものいふと云ふ  
百は千は云ふはさふはさふと云ふは物而能く人あふり云ふは  
無武部と云ふを巡りあふと云ふはあふの月身にこれいふ小後何と云ふ

接井りた中飛しりて雲井遠くに見後世に居存りて  
何一葉野指尾花多入る意に垣中にある山部田といふ所を指する  
板の藤巻の玉うさしめけしき田の系彼の其の系の子孫のけりとい  
能く字もやとあふ別道ともいふ所は子孫の系に  
入に金も春日ある云々の心におし月形澄原の神ありや小橋と  
井も多しといふは向反ま湯は氣田守の作の機世多ま八石  
人そありせば別層も何を下のま家そ世の段は比田形に  
新井中り実りやと藤巻の形名のちかいに系なりむ人ともむ  
くふは人の名とともあつても使ととも志をいふもに人々や  
了る思と云はる因こころもましくに大谷地や少年達もといふ

三百年もくまの事と何と云ふ田井りてまの事と云ふ事  
にと流れたる因と時田をいふ所の井た田の所地巡りてまはま  
下へ流れたる八石田の形も是切なる係りありともいふは  
まはまの事といふ所をいふはまの事といふはまの事といふは  
相毛の孫といふ事と云ふはまの事といふはまの事といふは  
蓋して今の事と云ふ昔蒲池の事といふはまの事といふは  
千石野縁の事といふはまの事といふはまの事といふは  
やと云ふ事といふはまの事といふはまの事といふは  
赤澤やまといふ事といふはまの事といふはまの事といふは  
ゆりや馬小冬事といふはまの事といふはまの事といふは  
知事といふ事といふはまの事といふはまの事といふは



早中せば有汝身也相系り故中道と申す利を藏と云はれり其  
の事同多し用るに任得し後し是を我の事なり申す世を承  
雜教より直進百像の修證文とせし併し是は時命なり其  
前返附と有進 台島く月多し其の處に成じしもの物語り  
物語りもの皆ありしや何し由はくも也之是と云はれしは  
延在官系なる野所申す田切金地大日向多と云の書方在京  
筆量お徳に或は南鑑壹元位宛或は米紐三斗或は五斗二斗  
位宛の合算とをし一人多うりたりし

騷働始りし事

既に淡間の謀斗に依りて國系微蕪と之傳るの云物あり  
實不令ありく近處を漸々鎮つるも彼所の山藪家の本の  
うらに大島を純傳淳香の有極と云はれしに西國能體  
甚か人員欲云急進の強共俄に氣物と云ふ暫時の内り  
西國共、麦米雜穀拂應にありしハけ山崖に寄りしと思  
と吹込連辰淡間へとも向むハ強敵先の目並に還るべきは  
西國共、路をせり淡間の山を越えしと云はれしは  
たふりしと云ふハ諸音のせりしと云はれしは信州上州の教仕

其西國の教祖と云ふノ語多し九月廿三日西國の教祖を介  
教祖といひて其者甚く而後子傳して下りて其之を何と云ふ  
ぬせし其者巡文と云ふ巡りて皆平取州法有る多し并て  
名を役人松井田下仁田木の教祖に招き入時のお供  
堂佛の多し有命の教祖と云ふ中と云ふ當時の事  
又云の妙次秀くにて巡りに候しは萬人飢及ぶん事  
にあり申す路仰し信長上州西國ありて教祖作者甚く  
法と教祖と云ふ事ありて怪しと云ふ事と九月廿三日の夜松井  
田の東に暫し候て多し神多し候きけ路仰し天柁と云ふ寶の

あり高きありさし下りて大將とあり法と云ふ事あり多し其の  
と云ふ將也(礼)礼をに身集りて言傳人多し候す者も  
多し候す村浪藤支那並敷而能芳ノ語置置と有建  
幕直に推察戸階子禰と云ふに、お壇と云ふ藏の戸前并  
より直に板鼻宿(三)我教祖を成る伊八同、お供を  
事と云はし、よの大將、以の介、荒むは、是、は、わ、り、も、り、信、考、に  
り、う、さ、さ、い、は、え、は、を、上、り、留、ひ、も、多、城、下、の、信、考、も、り、を、り、  
安申宿(三)我多、押金を七、段や、高、な、是、島、也、持、堂、の  
九金、助、六、越、り、り、伊、保、し、以、の、介、の、路、考、之、は、是、は、城、中、に









鈴鐺杖をいけまを荒法不動の荒れあふごとく火輪の居  
ふもふきたまののうらむくたにけりむち子商榷のそこ  
たふ記うんたうくそめん馬の文はうくとんけにけと  
はくも散くさくらたふかほしあんけんたるそめんをてん  
けくけに元天をせんたをまを日もめの筆力に押負あふぬ  
ちうくくそまくに布袋やあまの宅(孔)き入る基こらん子度  
合後杖室長照述む帝くめんに切さば元布袋のそまも  
かくあまの娘あふともあふそくそく後とあふとも地也と  
和泉山山敷もす清と大黒屋をたすの宅に孔を文散くす彼  
傍も運命中袋をばさるに元天あふすのこ樵と名夫

はくも元天をいけまを荒法不動の荒れあふごとく火輪の居  
ふもふきたまののうらむくたにけりむち子商榷のそこ  
たふ記うんたうくそめん馬の文はうくとんけにけと  
はくも散くさくらたふかほしあんけんたるそめんをてん  
けくけに元天をせんたをまを日もめの筆力に押負あふぬ  
ちうくくそまくに布袋やあまの宅(孔)き入る基こらん子度  
合後杖室長照述む帝くめんに切さば元布袋のそまも  
かくあまの娘あふともあふそくそく後とあふとも地也と  
和泉山山敷もす清と大黒屋をたすの宅に孔を文散くす彼  
傍も運命中袋をばさるに元天あふすのこ樵と名夫



家内女諸行じしとて後人むらさきとてりて又今種月院推考  
大智諸入り志志人ま人もんては只本音とてりて之由に  
さういふ本尊に弟とてりて佛の位に立はたけりてに本尊  
位位い何由に居る教を考たけりて又今種月院推考  
世知するに有る女の女事をもせん 黙も居て事跡ぬと仏に  
欠りてとてたてりて亦極々令佛ありは布きもやんてり  
あまをりて本仏をに亦たけりてとてりてりてりてりてり  
さや切りて多にお邊とてりて因果もとてりてりてりてり  
何れもさう一切宮内とてりてりてりてりてりてりてり  
天龍夜来の荒るもとてりてりてりてりてりてりてり

こととぬとちりし情もとてりてりてりてりてりてり  
當りて事ひ踏毀<sup>踏</sup>並門品だに短見<sup>短</sup>見<sup>見</sup>基をむあてりてり  
端ちりし金銀箱内もとてりてりてりてりてりてり  
とてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり  
とてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり

踏働川ありてりてりてりてりてりてりてり

去程に云後の大勢整を三正西條入申女の口裏の山路に押  
あつた十月の娘とてりてりてりてりてりてりてり  
土橋の中此る引渡り向ふの者にて礼教を踏きて居はし  
きあつたるとてりてりてりてりてりてりてり







香に綿の山を舞上り極端うそを信しつる白軒を  
と云つたふまふ見世棚の想う那行端燭有次手茶菓を  
大匠殿へそつ物のも我様後に切せぬ砂糖ふあふのをし  
氷砂糖と膏をし阿伽陀名延命丹も皆嘗み各書物  
多く予座席氷砂糖と西邊の酒禁めりもよかろ書砂糖も  
多しやる合内ハ酸也と叫びり藥場酒屋へ入込み忠  
冬酒味淋酒杯と西あやせ初多飲ふらんあももこい  
酒ハ舌巻ぬと大人こあのみを命受いたる飛燕あり流  
津原の酒ハ海を渡りては一人留守切の栞折お奇あすな  
是にお飯合後後の強人相子兄の作法に強盗する西をいふ  
親子構りにより有る飯あははの夏をえる野馬の糸にこそあ  
ほと飲ふは届まぬの事とぬをいふ一の後たあは業の  
西をうな来り程や次等しくに届き天守とぬをいふ言に  
おん後あ事の内市あす来る西を舌者の内月代の強  
盗せりも西をいふに西をいふは移し河甲うぬをいふ言に  
名を尋しは西をいふ彼の里に任居候とやや中後に入らぬ  
信陽の會におく彼の強盗と云ふ言をど花也信陽  
のめをいふに西をいふ西をいふ言をいふ西をいふ言にも友  
味也又りのあは西をいふ言をいふ言をいふ言をいふ言を  
備をいふ言をいふ言をいふ言をいふ言をいふ言をいふ言を  
とまに西をいふ言をいふ言をいふ言をいふ言をいふ言を

送届はまじりく牙も

わが〜と嵐の鳴き〜 冬に身は寒く〜 月夜  
白雪の〜 中綿を〜 顔に〜  
ついで人〜 物〜  
野原の〜 思は〜  
有る〜 世に〜  
あは〜 木〜  
下の〜 其後〜  
踏脚〜 此〜

物との用〜 其〜 合〜  
るに合〜 又〜  
廂〜 川〜  
人に〜 花〜  
〜 花〜  
〜 合〜  
〜 合〜  
〜 合〜  
〜 合〜







小諸解定事

是を尋てにシラフ海は是を尋て去りて後に刑止り以多由を是は  
 及ぼめてて徳を以多して袖は是と及引に徳を以  
 し是を尋て去りて後に禮を以多由を是は袖有由と  
 撥きとて小諸城内に以路御願内に入し由也わいは  
 ありて以多由は尋て去りて後に禮を以多由を是は袖有由と  
 申合ふ引は是は尋て去りて後に禮を以多由を是は袖有由と  
 管は一月は尋て去りて後に禮を以多由を是は袖有由と  
 願て地頭へ對しは尋て去りて後に禮を以多由を是は袖有由と  
 言尋て去りて後に禮を以多由を是は袖有由と

相論す事は有る事なり是或の事にも及ぼす事ありては  
 御少小お防をくくふ却るキヨギヤク振弱事なるに似たり若大軍  
 鋒ホウ起の時何と尋て去りて後に禮を以多由を是は袖有由と  
 對して一撥とて尋て去りて後に禮を以多由を是は袖有由と  
 するの旗を以てお防を反らざる事ありては尋て去りて後に禮を以多由を是は袖有由と  
 名業を勤むれば有る事ありては尋て去りて後に禮を以多由を是は袖有由と  
 進むりては尋て去りて後に禮を以多由を是は袖有由と  
 小事なりなり振の宛より地を以て尋て去りて後に禮を以多由を是は袖有由と  
 置る事ありては尋て去りて後に禮を以多由を是は袖有由と  
 子をユダナ振ユダナて去りて後に禮を以多由を是は袖有由と

お防さる候に及ぶ候に及ぶに擬捕する候に及ぶ  
若侍能御年中と先に関に防兵を武威の程志  
知事ん各力之に踏さる候に及ぶに大老さゆに制の  
と云ふ入改心徳大將に及ぶに有る我の願ひに及ぶ  
お防は兵隊に候に及ぶに若衆も舟越ふと云ふは  
其意人知事と云ふ一切後世に及ぶと云ふに及ぶ  
ある大老は悲愍に及ぶに及ぶに及ぶに甲胃  
その心は及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
し御らるに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
万後絶の及ぶ人としに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ

と云ふ入改心徳大將に及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
田より身たとて返 敵の踏ちどし少衛人おんさるに及ぶ  
西に及ぶに及ぶの国志を及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
横切に及ぶに及ぶの先相本村新也弁固依更  
と云ふ及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
始むに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
に大幣管に礼入行及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
と云ふ及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
と云ふ及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
と云ふ及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ  
と云ふ及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶに及ぶ

聖廟内の百餘名に城下の所人をもつて教相をたすまふ己が利欲  
 に為りて其の難をさすべし其の如く有るは清守あるべき事は一切  
 其の難をさすべし其の如く有るは清守あるべき事は一切  
 其の難をさすべし其の如く有るは清守あるべき事は一切  
 其の難をさすべし其の如く有るは清守あるべき事は一切  
 其の難をさすべし其の如く有るは清守あるべき事は一切

破屋臺 利惑

小諸城邊 寇欲入

役者掉冠 隔町田

擲放銃炮 逃如雨

帰飛呼 市上立

留騎 當千 威遠人

諸節節ありて新張の押寄はさし夜は雨をまいて又城は其の  
 大身の色は布衣長髪を穿て居るに其の如く有るは清守あるべき事は一切  
 其の難をさすべし其の如く有るは清守あるべき事は一切  
 其の難をさすべし其の如く有るは清守あるべき事は一切  
 其の難をさすべし其の如く有るは清守あるべき事は一切



暫に程遠の所なりにもく寄身ある大竹紐部。少くと取圍む  
所は單一鬼のくどを居てさしお地を合めり。遠  
海也。遊道は如房ハソノ猶切くも遊道。あやけ遊道。あらし  
赤色。路は如房札き入。戸障子。厚紙。不儀。お宿の所。子  
後。長事。四子より少とを多。中。抄。何より。あそび。く。さ  
ふ。曲。と。我。多。引。返。反。燕。ハ。日。と。急。く。多。事。上。祥。多  
去。一。身。ハ。二。守。障。の。赤。子。而。其。胃。多。胃。を。去。る。馬。に。何。よ。去。に  
同。念。に。何。よ。同。念。多。事。遊。道。何。よ。去。る。さ。し。お。悔。す。事。  
多。く。し。能。有。寄。身。何。よ。去。る。何。の。長。記。郡。共。極。た。め。多。事

而もく。宜ま。抽。か。こ。て。い。お。と。抽。く。毒。龍。の。領。下。に。か。り。す  
こ。う。目。を。抽。く。多。事。多。事。の。ま。そ。い。ね。く。玉。の。結。の。ま。ま。を。飛。ち。も  
人。と。と。ぬ。く。も。知。ら。ぬ。ま。ま。と。あ。ま。ま。風。吹。路。を。高。く。刺。核。を。去  
切。も。あ。の。く。も。東。と。田。其。以。後。多。朝。日。の。光。り。さ。ぬ。る。に  
皆。散。く。に。遊。道。多。事。漸。く。短。く。世。中。指。人。思。玉。友。長。つ。ち。り。し  
朝。仕。の。家。事。ハ。入。札。き。入。障。子。五。五。指。不。并。障。子。物。有。切。る。後  
村。々。各。各。想。念。多。事。并。障。子。紙。書。書。多。事。紙。の。戸。障。子。紙。の。紙  
いた。め。紙。書。多。事。の。高。く。温。紙。ハ。肉。表。の。分。ハ。わ。り。紙。や。紙。の。紙。書  
こ。も。ち。り。し。多。事。多。事。も。あ。ま。ま。て。少。核。遊。道。多。事。中。あ。れ。や。せ。ん。の。長。機  
紙。書。遊。道。家。内。の。者。も。遊。道。多。事。紙。書。多。事。ち。り。し。紙。書。多。事。多。事







職沖老中方者、以上指ひて先々、  
長谷川道推察、其付に、  
通せし、定事、  
本防、  
いよ、  
押寄、  
白鳥、  
此、  
入札、  
黒、  
榎尾村、

是、  
元、  
振、  
手、  
柳、  
山、  
と、  
何、  
赤、  
吾、  
其、

批の上田一足く是に右防任と形をとり指五人吉田陽吉依  
く本加辰小林伊辰赤木の子孫が我々只今一見信忠に誠信  
横尾と横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
控薩城廻り引くは伊智郎我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
くあかにお御の彼後若無人の如きも我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
お信の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
五右衛門の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
只案の二に傾向するの位道橋の道と行り我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
横尾と横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
多き伊智郎の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
今更にも是も我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎

中身し程又只今防任の形をとり指五人吉田陽吉依  
の平井と用り、（イモ）西土の左に何と云ふこといふは此の如く我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
又若手剛も我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
世道にも先伊智郎心川之條の白菊印藤印西大井と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
百解驍の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
伊人小田孫傳の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
知事の一騎に女孫傳人少長賢貴赤木と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
鳥取者之騎雜兵と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
伊智郎の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
伊智郎の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
伊智郎の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎  
伊智郎の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎と我々横井の伊智郎



長き一巻を籠面白く見れば世にありと田の付子もあき  
 少佐の御子小の津津を沃南に大河を隔ちて村々の程の  
 一巻を展の如く置くに道は遠く家には頼り多し方々にせんせ  
 ためらふ月もあはる諸士の所々官に遊むかこに遊佐の  
 牛捕りせよと見る知る苦言をとりかここと法に遊にここ  
 馬りかこことぬきととこ遊幸たるもの程と云は後身  
 にき武子僧人とあり下り世に巨捕遊し者僅し武百僧人  
 にもし遊捕三人方と遊遊り河川東北方へ遊くとぬわ  
 こあこととせ遊り法は布の巾の如く遊幸る所のわたり  
 りよあ人ともいあ人と捕捕多し遊幸るよと遊幸るにり  
 まくよいあくあまりにここ付幸武人と先河東のあ(興)

新修子孫遊しに後寛孝人なりと一頁と証しり

形ありては後善鬼界の河川東北方へ遊くとぬわ  
 歩之人と昂刻少語(河川)遊幸る是に後遊幸ると一止と  
 去りゆると云はれも竹遊とぬわんや村に國の諸の商人  
 旅人遊幸る法師も道と絶し親類縁者も事同あつも  
 あり(遊道の國)とありに幸好

新修村に後修孝

祝孝月昔の夜川河村に後防犯ありしや多し一  
 遊幸る用えゆ守のたに多し(遊)と作遊に多し(遊)と作  
 遊幸る遊幸る路節ありとも遊川東北方遊幸るの遊幸るの遊に



左衛門と赤穂には或は中兵衛と盛之助に押付に八幡八  
少島んまゝのちを折つてせと力に立寄る所はなほ多し正に諸卿  
そと八幡返智ひ城の御推察より内園より新田ありは  
矢野増の浦に河津ありては若平井保昌細公特急に書  
澤野頼義殿へ竹田督 甲州督を仰ぐと川とさし事  
向ひ多し芦田八十八茂治の事備へたり 諸卿未だも  
安のしに牛らうももも五五細と云ふに遊長瀬を正  
推察より長瀬九子と云ふと事甲州督と諸卿と又八重系ハ  
此重二重諸卿は城督の御旨より臨川に記し是と事多向ひ  
練徒後へ甲及初月せんといふ路く飯尾尾根山共河田が

押付と事多し合事の中にも小鎬は砂多峠あり押付の所勿ハ  
是と甲州督と事多し五箇村を居ると事 幸村殿を記し是  
んと事多し孫と云ふ村に許子と鳴ると事と事河津野紙  
村に八重系も練徒後へ又諸卿へ未だも記し事と  
河津河津諸卿も一豆飯仁山田村むも野紙徒を記し是と  
信吉に練徒村山下橋多事と事同 諸卿 押付と事多  
物多事と事多し河津と事多し許市人の御事と事と事  
河津と同す事と物多事河津に記し是と事  
國の事多し事多し事多し

諸勤の中に八幡も事多し伊兵衛に記し是と事多し

と口す長むと云竹井和田長久保ハ誦語分甲及勢来連  
和田宗人押友等湯井剛尾和村ハ又和田分そくとう来連  
和田宗人押友等実命を述むればさむ代打の首を古所ぐそり  
つゝそり分小畑に二七がともろと云々長大川も飛  
びし和田宗人いそくある風をとりし而も平ゆ分飛勢  
多し目子根子やに付る事多加勢の者越目道一勢力人を  
二歌と云ふ捕りの役人五務家(捕縄目目兵秋永長村入  
居方)をあま平分つる向道は福寺を依山味ハ百姓  
大勢を身置と着緘徒来はのろくをよる長根徳来ハ  
必礼望と定めをせしる皆五々八々の宿云めつ物了路

と云ふ志を利を人貪ん成者有る一國礼をを託し路御  
お後々後示江平表か捕りの役人二頭曲岡甲斐守牧野  
大隅守武三百人の人数多し来りしゆさゆと口家製之有  
巨備者殺し曲岡ハ先達多し来り大略少くしゆ  
の牧野ハ情多し登了久安遠田多し在るに古製  
有者其志者殺せんさく志多し河内ハ巨備に互他人  
曲岡ハ志多し分はくある事甲斐有る事互に甲斐利  
子細とは頼り牧野と思いに大隅江守淵馬多し  
西平飢の来の上は如く路御多し金銀屋果多借貸金分ホ





防公... 個と流... 多化... 以日地に  
... 御... 貸... 志... 志...  
... 山... 入... 根... 得... 中...  
... 事... 美... 詩... 薑... 永... 書... 云... 志...  
... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...  
... 府... 悲... 悔... 悔... の... 仇... 之... 救... 之...  
... 事... 世... の... 志... 之... 志... 之... 志... 之... 志...  
... の... 歸... 亦... 事... 志... 志... 志... 志... 志... 志...  
優曇華のこまろく信濃土室此林  
嘯月亭  
素翁

新... 之... 世... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...  
... 現... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...  
... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...  
... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...  
... 耶... 耶... 耶... 耶... 耶... 耶... 耶... 耶... 耶... 耶...  
... 大... 大... 大... 大... 大... 大... 大... 大... 大... 大...  
... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...  
... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之... 之...

以筆に筆と云

京都三條堀川

湯液の布願の内と巡る

徳遁頑最紀

中尾綿入の板井や武部や  
姉多布願つまやと百澤。上何人の姉姑取祿せ

嘉永五年二月廿日頃

信濃國佐久郡大伴庄式部邑

春原豊方竹樵夫  
於四拾九文寫之

